わたしの五百円玉

小　五

わたしはその日、あまりの暑さにコンビニへにげこんだ。店内は、さっきまでの暑さがまるでうそのようにすずしかった。あせで体にまとわりついた服にけん悪感を覚えながら、わたしは入口横にあるパンの売り場へ真っ先に向かった。早く買って家へ帰ろうと思い、食パンを手に取りレジへと足を運んだ。カウンターにパンを置いた。

「これでお願いします。」

小ぜにがあまり無かったため、千円札と一円玉を数枚出した。

「ちょうど、九百円のお返しになります。」

おつりを受け取り立ち去ろうとしたとき、ぼ金箱が目に入った。「アフリカの子どもたちへの支えん」と大きく書かれている。以前、おばあちゃんがスーパーでぼ金箱にお金を入れていたのを思い出した。たった今、サイフに入れた五百円玉。わたしはそれをもう一度手に取り、ぼ金箱に入れた。このお金が支えんのために使われるのだと思うと、よいことをした気持ちになった。わたしはその一日を、すっきりした気分で過ごした。

数日後、わたしは本屋へ行った。好きなまん画の最新刊が発売されたからだ。目的のまん画を手に取った後、店内をぶらぶらしていると、もう一さつ気になる本を見つけた。その本は、以前買うか迷っていた本だと思い出し、

なやんだ末、買うことに決めた。しかし、手持ちのお金が少し足りないことに気が付いた。そのとき、ぼ金箱が頭をよぎった。「あのときの五百円玉があれば」と、少し後かいをした。仕方なく、一さつは元の場所へともどすことにした。レジにならんでいるときも、頭からあの五百円玉がはなれなかった。

五年生になって、学校の授業でアフリカのなん民について知る機会があった。テレビの画面にうつされたのは、うずくまる小さな子どもと大きな鳥だった。みんなの頭の上に、はてなマークがうかんだ。先生は口を開いた。

「これは、もうすぐが死する子どもと、それを待って食べようとしている鳥です。」

それを聞いて、わたしはおどろいた。自分よりもおさない子が、ほねの形がくっきり見えるほどにやせ細っている。見ているだけでもいたいたしかった。よくよく見てみると、周りの風景もひどかった。かれた木々、茶色くかわいた地面。同じ世界に住んでいても、わたしたちとはちがいすぎるかん境だ。

アフリカの人たちについて、わたしにも知っていることはあった。例えば、自分の着る服すら手に入らないことや、飲み水が不足していることだ。

しかし、ここまできびしい状きょうだとは思ってもいなかった。自分はいろいろ知っているつもりだった。だからこそ、予想をこえたその様子におどろいたのだ。それと同時に、ぎ問もうかんだ。ずっと前から支えんは続いているのに、こまっている人がまだいる

のはどうしてだろうか。きっとそれは、わたしの思うよりもずっとたくさんのこまっている人がいて、支えんの手がまだまだ足りないからではないだろうか。

それから少し経って、ぼ金された百円でできることについて知った。例えば、「はしか」というウイルスから子どもを守るためのワクチンなら二回分。病気にかかりにくくしてくれるビタミンのカプセルだったら六十じょう。四から五リットルの水をきれいにすることができる薬だったら三十六じょう。これが百円でできることらしい。わたしの入れた、たった五百円でも様々なことができるのだ。そう思うとあのときの後かいは、さっぱりと消えていった。

わたしは、あれから積極的にぼ金をするようになった。わたしでも力になれることがあると知ったからだ。ぼ金でなくとも着られなくなった服を持っていけば、必要な人にとどけてくれる場所もあるそうだ。さがしてみれば、身近なところにも助けになることがたくさんあるのだろう。

百円で救える命があることを知った。わたしの行動一つで助かる命があることを知った。困っている人に声をかける勇気はないけれど、自分にできる小さなことをしてみたいと思う。自分はめぐまれていて、好きなこともできる。いつか、世界中の人々がそういうふうに、自分の人生を幸せに送れることをわたしは願っている。